

ごあいさつ

代表世話役 西本 孝

9月から10月にかけて、台風が相次いで日本に襲来し、各地で大変な豪雨被害をもたらしました。この秋の豪雨被害は、東日本から北日本に集中していたので、岡山はそれほどの被害を受けなかったようですが、皆さんはいかがだったでしょうか？ 被害を受けた関係者がいた方にはお見舞い申し上げます。昨年の岡山県の被害地からも、今回の災害を受けた地域に救援に出向いたと聞き、日本列島が災害に見舞われ、互いに助け合うという関係ができあがっていることを良いことだと思います。こうしたことから、日本の社会が成熟している様子を知ることができます。いずれにしても、自然の驚異には、私たち小さな力では太刀打ちできません。日頃から備えておくことの重要性が増しています。そのためには、日々の自然観察が大切ではないかと考えています。

今後の予定をお知らせします。年明けには新年会、3月には第14回自然観察会、4月には恒例の毛無山での自然観察会（第15回）、6月には年次総会と第16回の自然観察会を開催します。これからも会員の皆様と一緒に、自然観察を通じて自然の不思議さを実感しながら充実した楽しい時間をもちたいと思っております。皆さまの参加をお待ちしております。

県外研修 2019—尾瀬ヶ原（自然保護の原点をたずねて）報告

- 開催日時：2019年8月4日～7日
- 場所：尾瀬沼、尾瀬ヶ原、至仏山、戦場ヶ原
- 内容：有志の参加者9名が、自家用車に分乗して、3泊4日の日程で、群馬県、福島県、栃木県

を訪れ、ぐんま自然観察指導員の会のメンバー3名とも1泊目の宿を借りきって交流会を開催し、互いの会の活動について情報交換した。
●詳細：藤本巨の報告を参照

中国地方5県交流会と第13回自然観察会の報告

- 開催日：2019年10月26日～27日
- 場所：国立三瓶青少年の家と三瓶山
- 内容：10名の会員が、自家用車に分乗して、島根県の会場へ集合。室内での講習（植樹祭に学ぶ、

NACS-J 指導員講習会 40周年記念行事）と恒例交流会、野外での自然観察会（男三瓶山登山と山麓でのトレッキング）を行った。
●詳細：福元隆三の報告を参照

新年会のお知らせ

- 開催日：2019年1月25日（土）
- 詳細：未定（18:00開始予定）

- 幹事・申込み：福元隆三
mimoakayu@docomo.ne.jp

第14回自然観察会のお知らせ（担当は大森隆志、参加希望者は西本まで）

- 開催日時：2020年3月15日（日）
10時～14時（雨天決行）
- 岡山県の生物多様性のホットスポットを訪ねて（No.2）草間台の春植物—その1
- 参加者は西本まで連絡してください。

- 集合 午前10時 ふれあいセンター満奇
- 内容：ユキワリイチゲ、セツブンソウ、アズマイチゲなど石灰岩地特有の植物を中心に、春先に咲く花を観察する予定です。
- 持ち物 昼食、飲み物、筆記用具、雨具

第15回自然観察会のお知らせ

- 開催日：2020年4月26日（日）
- 内容：毛無山の山麓で自然観察

- 内容：例年通りのコースと日程で、春の花や鳥、動物を観察する。

2020年度年次総会のお知らせ（予定；日時場所などは、確定後にお知らせします）

- 開催日：2020年6月14日（日）
- 会場：西大寺公民館

- 担当：山根一郎
- 詳細：未定

8月4日(日)は、県南組の参加者と合流し5名が車2台に分乗して、予定通り6時に岡山を出発した。山陽道、新名神を通り、大津SAで県北組4名と合流。真夏の日差しが降り注ぐ中、車3台で伊勢湾岸道から新東名道をひた走り、海老名JCTから圏央道にはいった。車はさらに鶴ヶ島JCTから関越道に入り、赤城山を右に見た後、沼田ICで高速道をおりて120号線に入り、片品村から401号を北上、予定よりやや早く尾瀬戸倉温泉の四季亭に到着した。

ひと風呂浴びたあと、既に到着されていた群馬県のNACS-Jのメンバー3名の方々と夕食をとりながら、群馬の自然保護活動の歴史、活動内容、尾瀬の見所などの説明を受けた。山々に囲まれ、日本の自然保護活動の原点ともいえる「尾瀬」を擁している群馬県だけあって、自然保護活動の歴史は長く、現在、60歳代のメンバーが班に分かれて役割を分担し観察指導員会の運営、機関紙発行を活発に行っておられる。ただ研修会がやや専門的になりがちで人が集まりにくく、NACS-Jのほかにも観察会を行っているグループがいくつかあるようで、若い人達は別に観察会を催している、といった課題もあるようだった(写真1)。



写真1. ぐんま自然観察指導員の方3名と交流会を開き、夕食をいただきながら活動報告、尾瀬の魅力について話を聞いた。

8月5日(月)は、7:35に四季亭のマイクロバスで大清水に送ってもらい、8:00発のシャトルバスで一之瀬に到着、ここから峠越えの山道に入り、尾瀬を守る象徴となった場所一石清水(車道が建設されて涸れる運命に直面していた湧き水;写真2)一でのどを潤し、9:30に三平峠に到着。



写真2. 自然保護の象徴となった岩清水で、患の水でのどを潤す。



写真3. 快晴の青空を背景に尾瀬沼に映り込んだ燧ヶ岳と一緒に記念撮影。

ここで勝部さんが見つけたギンリョウソウ(ユウレイダケ)の白い花?を初めて観ることができた。峠の下り道、大きなフキの葉に似たのはマルバダケブキとのこと。10:00には三平下に着き、少し歩くと青い夏空の下、尾瀬沼が燧ヶ岳を映す絶景ポイントに到着(写真3)。周囲には高層湿原がはじまり、コバイケイソウ、オゼミズギク、キンコウカ、モウセンゴケなどを観察し、10:30に長蔵小屋に到着。小休止の後、ニッコウキスゲ(黄色)、オニシモツケ(白)、コオニユリ(橙)などなど色とりどりの美しい花々を観察した(写真4)。



写真4. オニシモツケなどの多くの花が出迎えてくれた。

11:30に浅湖湿原に。ヒルムシロ、コバノトンボソウ、ワタスゲや飛び交うアオイトトンボなどを観察し、クロベ(ネズコ)の林を通りぬけ12:00に沼尻小屋につき、おにぎりの昼食をとる。

沼尻をでてまもなくアカミノイヌツゲをみながら白砂湿原に。西本先生からは、枯れた植物が細菌による分解をうけず重なって泥炭をつくり、その上に新しい植物が根を張ることが繰り返され長い年月をかけて少しずつ盛り上がって大小のでこぼこができる、という湿原のでき方について説明を受けた(写真5)。



写真5. 白砂湿原では湿原の成り立ちを学んだ。

14:00に見晴十字路に着いた時には、至仏山が遙か遠くに見え、時間に余裕がないため、東電小屋を迂回するルートはあきらめて尾瀬ヶ原の木道を西に直進。木道の両側には至る所に大小の池塘がみられ、スイレン科のヒツジグサが涼しげな緑の葉を拡げ、白い花が咲いていた(写真6)。尾瀬ヶ原は標高1,400m、8月でも気温が30℃を超えることは稀のようなのだが、この日は脱水をきたすほど暑く、竜宮小屋で小休止した後、山の鼻の至仏山荘にたどり着いたのは16:45だった。



写真6. 池塘に白い花を浮かべたヒツジグサと燧ヶ岳。

8月6日(火)は、至仏山登山を断念した人もいたため、至仏山に登る西本先生を含む4人と、鳩待峠へ向かう山根さんをリーダーとする5人の2班に分かれての行動となった。日本100名山のひとつ至仏山は標高2,228m。登山組に加わった私にとって直登ルートは楽ではなかったが森林限界を過ぎる頃から、コオニユリ、クルマユリ、ハクサンシャクナゲ、タカネナデシコ、イブキジャコウソウ、ミヤマトウキなどに加え、至仏山を含む限られた場所にしかみられないホソバコゴメグサ、ホソバヒナウスユキソウなど蛇紋岩の間に咲く希少な高山植物を多数観察できた(写真7~9)。



写真7. 至仏山のお花畑の保護するために設置された木道越しに、尾瀬ヶ原の全景と燧ヶ岳が一望できた。

山頂から尾瀬ヶ原を展望したあとは、急な雷雨にも「恵まれ」ずぶ濡れになったが、暑さが和らぎ夏山らしさを満喫できた。鳩待峠で2班が合流したのち、バスで戸倉温泉に戻り、ありがたいことに濡れた服を四季亭で着替えさせてもらえた。そこから再び車3台に分乗し120号線を東にとり、丸沼、菅沼、金精峠トンネルをぬけ、夕刻には休暇村日光湯元に到着。温泉で汗を流した後は夕食を囲んでの各人の専門的な話で盛り上がり、おおいに刺激を受けることになった。



写真8. 至仏山を代表する花のホソバヒナウスユキソウ。



写真9. タカネナデシコが見事に群生し、保護の成果が見られた。

8月7日(水)、朝食後は湯滝に立ち寄ったあと戦場ヶ原での自然観察をおこなった。戦場ヶ原は「もともと湯川が男体山の噴火で堰き止められた堰止湖であったが、その上に土砂や火山の噴出物が積もり、さらにその上にヨシなどの水生植物の遺骸が腐らずに堆積して陸地化し湿原となった。」(Wikipedia)とのこと。ピンクの綿菓子のような花をつけるホザキシモツケが至る所に観られた(写真10)。



写真10. 男体山噴火によりできた戦場ヶ原湿原を特徴づけるホザキシモツケが群生して、開花していた。

観察の後、先に帰られる県北組と福元さんと別れ、我々は英国大使館別荘記念公園を訪れた(写真11)。植物学者で自然保護協会会長でもあった武田久吉は、この地に別荘を建てたアーネストサトウの次男であったことがわかり、西本先生も積年の疑問が解けて納得。研修の最後を締めくくるのにふさわしい場所となった。



写真11. 旅の終わりに訪れた、英国大使館別荘記念公園内で再建された建物。幕末に通訳として活躍したアーネストサトウの次男で、植物学者の武田久吉博士は、尾瀬の植物を調べ、尾瀬の自然の重要性を訴え続けた。

炎天下での研修で体力の消耗が激しく、3日目に想定外の2班に分かれての行動となった点は今後の研修計画をたてるうえでの課題となったが、湿原や野草を目の前にして西本先生から解説をうけるという「特典」付きの研修を通して、湿原のでき方や高山植物について理解を深めることができた。また、同行のNOI岡山のメンバーの皆さんと四方山の話で親睦を深めることができたことも大きな喜びであった。

(参加者：西本 孝、池田和子、勝部弘和、斎藤由紀子、佐々木清英、福元隆三、藤本 亘、山内哲夫、山根一郎)

島根県国立三瓶青少年交流の家を拠点に各県より58名(内：岡山10名)の参加により交流親睦を深めました。25日晴れ、日中は「植樹祭を学ぶ」のテーマで島根の佐藤会長の講義を開き、NACS-Jの高川さんから、指導員講習会40周年を迎えて、今後の10年間の方針を策定中であるとの説明がありました(写真1)。夜は雨のち曇りと天気変動し、夜間予定していた天体観測はできず、私は早めに就寝。参加者は、夜遅くまで他県の人と交流しました(写真2)。翌日26日晴れ、三瓶山を登山コースとトレッキングコースに別れ、晴天の秋山を体感しつつ交流及び自然観察を深めました。

「植樹祭を学ぶ」室内での講義後、71回全国植樹祭(来年5月31日に三瓶北の原で開催予定。交流の家より1km程の所)の会場を視察しました。日本の森林の在り方を、植樹祭から今一度皆さんにも自然や森林について考えて欲しいというものでした。

現地では植樹祭の会場図作りの為、二次林の樹齢50年の松が間伐されているさなかで、森の中は重機が通った後でとても荒れた状態でした(写真3と4)。天皇皇后両陛下ご臨席の元、行われる儀式で最大限に見た目をよくするため、森林を伐採し道や会場となる広場を作り、植樹する為に木の少ない森を作る。この作業が毎年70年間繰り返されて来たそうです。

植樹祭のイベントテーマは「豊かな国土の基盤である、森林、緑に対する国民の理解を深める」です。現状日本の国土の67%が森林、その30%が国有林、林業就業者約4万5千人、自然保護、国土保全、教育観光保養、林業、これらの在り方や全容が見え辛く、解らない事が多過ぎると思います。自然保護の観点より注視して欲しい事があります。今日の日本において、自然エネルギーとしてのバイオマス燃料・発電の各地で需要が高まり、バイオマス材の相場が上がっています。50～70年の伐採期を迎えている森林を売りたい、国有林野の動きです。国民の財産である森林の使い方を誤り、自然の大きな破壊になり兼ねないからです。

森林は使う自然より守る自然である事を願っています。



写真1. 室内での講義。



写真2. 交流会は夜が更けるまで続いた。



写真3. かつての放牧地が放置されてきた二次林。



写真4. 樹齢50年生の松が伐採され、重機が動き回った跡があった。



写真5. 三瓶山(男三瓶)山頂と手前の丘はかつての採草地に植林。



写真6. 休憩小屋周辺(標高700m付近)は、カラマツの植林地。



アザミの仲間3種。写真7(左)。ヨシノアザミ。写真8(中)。キクバヤマボクチ。写真9(右)。ヒツキアザミ(山頂域のススキ草原)。



写真10. 1000m付近のブナ林では、幹に多数の着生植物が見られた。



写真11. 男三瓶山の山頂(左の標柱)周辺はススキ草原が広がっていた。



写真12. 三瓶山は活火山で、かつての火口には水が溜まっていた。

(参加者：池田和子、勝部弘和、斎藤由紀子、佐々木清英、谷合繁造、西本 孝、橋本智明、福元隆三、藤本 亘、山根一郎)